

# 生徒の社会意識の分析とその指導

(第 二 報 告)

石黒 彰二・中尾 正三・都築 亨

## I 研究目的

社会科は前年度にひきつづき、上掲のテーマをとりあげた。研究目的は前年と同じである。すなわち、われわれが社会科教育において、望ましい方向に生徒を育てようと努力しても、彼らはそれまでに家庭、友人、マス・コミュニケーションなどの影響によって形成せられた社会意識をもっている事実、常に直面する。社会科教育が単なる知識を与えるということに終るべきでないとするならば、われわれは彼らが現にもっている社会意識の実態を把握し、それがわれわれの願う方向と異なるひずみや偏向をもっているなら、その原因を可能な限り探究し、その結果にもとづいて教育の方向を考えていかねばならない。そうでない限り、われわれがいかにか善良なる意図をもって、いかほど努力したとしても、われわれの声は彼らの意識の表面をなでて通りすぎるだけで、彼らの意識の奥深く入ることは不可能であろう。

## II 研究の経過と方法

以上のような観点から、われわれは今までに、まずマス・コミュニケーションが社会意識に及ぼす影響について、次のような研究を続けて来た。

- ① 映画「しいのみ学園」に対する反応
- ② 「原子力平和利用博覧会」見学の社会的態度に及ぼす影響（以上30年度）
- ③ 「日ソ交渉」をめぐる新聞の影響
- ④ 映画「最後の橋」の鑑賞指導による社会的態度の変化
- ⑤ 映画「真昼の暗黒」の鑑賞指導による社会的態度の変化（以上31年度）

そして、32年度から、生徒の社会意識そのものを対象としてとりあげ、

- ⑥ 生徒の社会意識の分析とその指導の研究（第一報告）を行なった。そこでは研究の方法として

イ 文献の研究

ロ 受験雑誌の内容分析とその生徒に対する影響の調

査

ハ 社会科教育の内容と生徒のもっている社会意識の関連性の分析と検討

を行い、教育学部の大久保教授、上田、木原、成田助教授、本校の社会科教員、および他教科の教員と研究会をもち、その結果、次のような調査を高校2年、3年の男女生徒に対して行なった。

- A 簡単な形式論理、および、より複雑な推理を要する論理、の思考力に関するテスト。
- B 時事問題に関する知識と、それに対する態度に関する調査。
- C 人間の生き方に関する12の考え方（二つずつ対になった6組の意見）についての態度の調査。

この調査によって、生徒の社会意識のあり方——および、それらと、知的理解や論理的思考力、社会科教育の成果などの相互関係について、その実態を明らかにしようとしたのである。

今年度はその結果をもとにしながら、とくに社会意識がどの程度変わるものか、ということに焦点をしばって研究をすすめることにした。すなわち、前年度の研究対象となった高2、今年度高3の生徒（高2当時88名、高3、76名）について、前年度の調査項目のB、Cを、Cはそのまま、Bは今年度の時事問題についての知識を、（態度は前年度のものとはできるだけ対照できるようにして）調査することにした。

## III 研究の結果

### 1. 時事問題に関する知識および態度について

前年度、われわれは、①「三悪追放」と政治、②「きれいな水爆」と水爆の利用、③「米価問題」と社会、経済、④「ジラード裁判」と「行政協定」、⑤「国鉄スト」と労働問題、⑥「原子力の平和利用」の六つの問題を取りあげた。本年度は、できるだけそれと対応するような問題として、①「国会延長問題」と政治、②「日米安全保障条約改訂」の問題、③「フランス総選挙」と独裁化の問題、④「皇太子妃」決定と対皇室

感情、⑤「郵政スト」と労働問題、⑥「昭電事件判決」と政治・経済、の六つの問題を取りあげ、それに関する知識と態度を取りあげた、このうち、①と⑤とは態度に関しては前年度の①と⑤の調査問題と同じ問題を使い、又、⑥は前年度の①と対応させる意味でとりあげたものである。

各問題ごとに分析検討をしていくことにしたいが、調査結果の具体的な数字は、まとめて33頁にかかげるので、それを参照しながら読んでいただきたいと思う。(表1)

1(A) 最近の臨時国会の延長はどのような手続きで行われましたか。(1つだけに○)

- イ 社会党が欠席したが自民党だけの多数決によって行われた。
- ロ 重要議題が残されていたので満場一致で成立した。
- ハ 議長が欠席し、副議長が議場混乱のうちに延長宣言した。
- ニ 社会党の反対にもかかわらず議長の独断で延長宣言した。

1(B) 日本の政治にはとかく悪いことがつきまとうといわれますが、それについてどう思いますか。

(1つだけに○)

- イ 政治である以上多少の害悪がつきまとうのは当然である。
- ロ 政治はきれいなものであってほしいが、多少の害悪の入りこむのは止むを得ない。
- ハ 政治はガラス箱の中で行われるようにきれいなものであるべきである。
- ニ 政治に害悪が入りこんでくるのは政治組織そのものに問題があるのだからまずそれを直さなければならぬ。
- ホ その他

1Aについては正解の(イ)が約4割であるが、大体のところに分っていると思われる(ロ)をあわせると8割をしめる。細かなところまでは分らないが、大体知っていると思判断していいだろうと思う。それについての態度1Bをみると「必要悪」と考えるものはきわめて少なく、政治組織そのものを問題とするものが42%を占めている。きれいなものであってほしい、と願うピューリタニズムが(ロ)(イ)あわせて50%になるが、うち半分が、多少の害悪の入りこむのはやむをえないと考えるという点、注目していい傾向である。高校生らしい理想主義が一貫しているながら、現実への承認か、潔癖な背反か、批判的態度へか、どのようになっていくかは今後の問題であろう。その点で、前年度の調査での高

2時代の彼らを比較してみると、(イ)は3.4%→3.9%で大差なく、(ロ)の潔癖な理想が22.7%→25.0%であり(ハ)の政治組織を問題とするものが52.4%→42.3%となり、(ロ)の「ある程度」の害悪を止むを得ないとするのが、15.9%→25.0%となっているのは、高2と高3という彼らの一年間の変化を物語るものとみてよいのであろうか。

2(A) 最近の日米安全保障条約改訂の問題はどう進められつつあるか。(1つだけに○)

- イ 日本の独立を尊重するように改められようとしている。
- ロ 沖縄、小笠原の防衛もアメリカと共同するように改められようとしている。
- ハ アメリカが兵器や物資の援助を強化しようとしている。
- ニ 日本に独立の軍備をもたせ、アメリカは早く撤退しようとしている。

2(B) 日米安全保障条約改訂の問題についてあなたはどう考えますか。(1つだけに○)

- イ 日本は独立国だから独自の軍備をもつべきである。
- ロ 日本の領土は日本も防衛の責に当るのが当然である。
- ハ 日本は平和憲法に精神に従い戦争をさけるように努めるべきである。
- ニ 日本は経済的にも関係が深いからアメリカと協力すべきである。
- ホ その他

2Aについては、正解の(ロ)は35.6%であるが、(イ)とあわせると過半数となり、ここでもやはり、大体は知っているが、くわしい細部までは知らない、といえるだろうと思う。態度2Bについては、平和憲法を支持する(イ)が77.8%を占めて断然多い。

3(A) 最近行われたフランスの総選挙はどのような結果になったでしょうか。(1つだけに○)

- イ 共産党を中心とする急進派が大幅に進出した。
- ロ 共和的伝統を守ろうとする中道派が勝利を占めた。
- ハ 多くの小政党の分立で政局は不安定になった。
- ニ 共産党を中心とする急進派が大幅に落選した。

3(B) その結果についてあなたはどうか考えますか。(1つだけに○)

- イ 独裁化が促進されることになり、よくないと思う。
- ロ 安定政権が成立してよるこばしく思う。
- ハ 依然として不安定だから頼りなく思う。
- ニ 独裁化の危険がうすれてよるこばしい。

ホ その他

3 Aについては、新聞などで共産党の落選を大見出しで報道していたせいもあるのか、正解の(イ)が54.0%を占めていた。それに対する態度をみると、独裁への警戒(イ)と安定を歓迎する傾向(ロ)とがそれぞれ約30%を占め相伯仲しているのが目につく。この項目についてだけ二つ以上の意見を記入している(イ)が多い。このような対立しあう、しかし同居しうる感情を示しているものが多いことは注目される。

4(A) 皇太子の婚約決定はどのようにして行われましたか。(1つだけに○)

- イ 婚約者は皇室会議の意志を皇太子が受諾して決定された。
- ロ 婚約者は皇太子が自分でえらび皇室会議によって承認された。
- ハ 婚約者は父としての天皇の意志によって決定された。
- ニ 婚約者は旧華族の中から候補者がえらばれ皇太子によって決定された。

4(B) それについてあなたはどうか考えますか。(1つだけに○)

- イ 皇太子妃はもっと伝統や格式のある家からえらばれるべきであった。
- ロ 新憲法によって皇室も変わったのだからこれは当然である。
- ハ 象徴としての天皇がその後継者の妃をえらぶのはのぞましいことである。
- ニ 皇太子が家格にとらわれず婚約者をえらんだことはすばらしい。

ホ その他

皇太子妃の決定は、政治、マス・コミをはじめ、国内がわきたった問題であるだけに、正解(ロ)が94.6%と圧倒的に多かった。それに対する態度も、皇太子の態度をすばらしいとたえるものが60.6%と多かったが、当然とするもの(イ)が29.0%あったことも注意してよいことだと思われる。

5(A) 現在行われている郵政ストは何を問題として闘争しているか。(1つだけに○)

- イ 待遇改善のため。
- ロ 郵便料値上げ反対のため。
- ハ 郵政職員不当処分反対のため。
- ニ 警職法反対のため。

5(B) このようなストについてあなたはどうか考えますか。(1つだけに○)

- イ 一般の人々に迷惑を及ぼすばかりだから反対である。
- ロ 労働者の立場を考えて多少の不便は我慢すべき

であろう。

ハ 労働者の立場には同情するが、一般の人々に迷惑をかけないストの方法を考えるべきだ。

ニ その他

4に反して、時期的にはほぼ同じころにあった「郵政スト」の正解(イ)が、それが生活にはむしろ近い問題であるべきはずなのに47.4%と少ないのは、考えさせられる傾向である。このストに対する態度として、同情しつつ、方法をもう少し考えるべきであるとする(イ)が74.9%を占めている傾向は、前年度の彼らが(イ)を77.5%占めているのとほぼ変わらない傾向であると思う。さらに、前年度において、全面的に否定する(イ)が12.5%の(ロ)が6.8%今回は6.6%となり、むしろ積極的肯定であったのがから13.2%となっていることも注意してよいことであろう。

6(A) この間の昭和電工疑獄事件の判決はどのように下されましたか。(1つだけに○)

- イ 金を贈った実業家は有罪であったが、金を受取った政治家は無罪であった。
- ロ 金を贈った実業家ももらった政治家もともに有罪の判決が下された。
- ハ 金を贈った実業家ももらった政治家も証拠不十分で無罪が確定した。
- ニ 金を贈った実業家は無罪であったが、金を受取った政治家は有罪であった。

6(B) 日本の政治家はいろいろな方面から政治資金を得ていますが、それについてどう思いますか。

(1つだけに○)

- イ 政治活動を進める上に資金のいるのは当然だから政治献金はみとめるべきだ。
- ロ 政治を明朗にするためにはどんな理由であっても政治献金は一切受取るべきでない。
- ハ 政治家が政治活動をするため政治資金をうるのはよいが、節度を保つべきであり公開すべきだ。
- ニ 現在の社会では政党と財界の結びつきに問題があり、それを改めなければならない。

ホ その他

6 Aについては正解(イ)が44.3%であり、無罪が印象的であつたらしいが、細部ははっきりとはしていないということが、(イ)が27.7%となっていることからもうかがえる。これは(1)(2)でもみられた傾向である。態度は「節度を保つべき」とする(イ)が40.8%でもっとも多く、社会そのものを問題とする(イ)が32.9%でそれについている。この傾向は1のBで、政治組織そのものを問題とするものが42.3%をしめていたのと、やや異なっている。これをたしかめるために1 Bと6 Bとの対応をしらべてみると表2の通りになる。すなわち、1

表1 調査B (男女計) - A・B問別応答数 (%)

	イ	ロ	ハ	ニ	(二つ)	なし		イ	ロ	ハ	ニ	(ホ 二つ)	なし
1 A	11.7	3.9	39.6	39.6	—	5.2	1 B	3.9	25.0	25.0	42.3	2.6	1.3
2 A	10.5	35.6	17.1	28.9	—	7.9	2 B	5.2	13.1	77.8	—	1.3	2.6
3 A	13.1	23.7	2.6	54.0	—	6.6	3 B	29.0	30.3	14.5	7.9	13.1	5.2
4 A	4.0	94.6	—	—	—	1.3	4 B	2.6	29.0	1.3	60.6	6.5	—
5 A	47.4	3.9	36.9	—	—	11.8	5 B	6.6	13.2	74.9	4.0	—	1.3
6 A	42.2	9.2	27.7	3.9	—	17.0	6 B	2.6	15.8	40.8	32.9	3.9	3.9

表2 問1:6対応分析 (実数N=76)

(6)

	イ	ロ	ハ	ニ	ホ 二つ	なし	計
イ		1	1	1			3
ロ	1	3	11	4			19
ハ		4	6	6		2	18
ニ	1	3	13	12	3		32
ホ 二つ		1		1			2
なし			1			1	2
	2	12	32	24	3	3	76

で(イ)をとったもののうち半数が6で(イ)をとっているのである。これは選択肢の表現のしかた、うけとりかたなどからもきているのかも知れないと思われる。

## 2. 人間の生き方に関する態度について

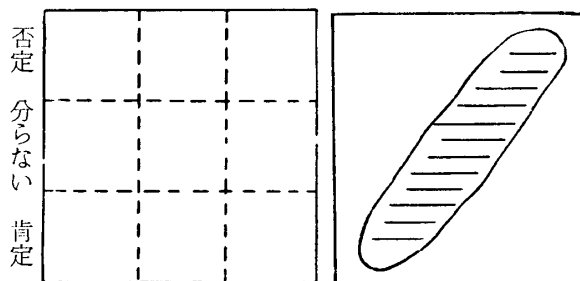
この調査については、前年度の問題Cをそのまま使用した。そこでとりあげた12の文章は、「螢雪時代」やその他の受験生を対象とする出版物の中から、代表的と思われる考え方を六つえらび、それと対応すると考えられる逆の考え方を、社会科教科書や、われわの話し合いによって作製したものである。それらの文章について、その考え方を⑤非常にそう思う、④そう思う、③ふつう (分らない) ②そう思わない、①絶対にそう思わない、という5段階の判断を加えさせるようにした。次いで、それぞれ関係する (反対と考えられる) 考え方についてその相互関係を分析した。例えば「人生は闘争である」と考える(1)について肯定の態度を示しながら、「人生は愛と協同である」と考える(8)について、やはり肯定しているものもある。こういう判断の矛盾がどのようにあらわれているか、それぞれ二つずつ対応する文の組み合わせの分析を行なった。次にかかげる表 (図1) は、前述の判断の①と③、④

と⑤とを一緒にして、否定的、分らない、肯定的の三つの群に分けて整理したものの表である。対応する文はそれぞれ相反する考え方であり、一方を肯定すれば他方を否定するのが論理的であるから、図2に示したところに判断がかたまるのが普通であり、そうならないことは判断が矛盾していることを示すものと考えられる。(しかし、その判断の矛盾が、思考力の貧しさを示すものと早急に判断するよりも、むしろその矛盾に、現代に生きる人間の姿がうかがえると考えるのがより妥当ではないかと思う。)

図 1

図 2

否定 分らない 肯定



(わくの中の数字は実数である)

- (1) 人生は闘争であり、闘争こそは進歩の母である。
- (8) 人間はお互いの愛と協同によって現在の文化を築きあげたのである。

表3 高2 (88名) 高3 (76名)

(8)

	6	4	14		5	4	13
(1)	3	10	11		3	7	6
	9	4	<u>32</u>		12	4	<u>22</u>

この問いの対応関係は高2の時と高3の時とはほぼ変りはないようと思われる。たゞ共に肯定するものが高2の時よりも減少しているものがややあるようであ

生徒の社会意識の分析とその指導

るが、この減少した部分が、どのような判断をするようになったか、ということについては、後で逆対応関係(35頁参照)を分析するときふれたいと思う。

(表3)

- (2) 天才でない者がこの世に認められるためにははたから狂人ではないかと思われるほどの努力が必要である。
- (11) 人それぞれの生き方がある。それを自分のあるだけの力を出して生きぬきさえすれば、その結果は問うところではない。

表4 高2 高3

(11)

4	3	27	1	1	<u>30</u>
2	6	4	2	6	13
3	8	<u>31</u>	2	2	<u>19</u>

ここでは(11)を肯定するものがふえ、しかも(2)を否定するものがふえているように思われる。3年になって努力の限界を知り、(2)の考え方に疑問をもちはじめたのだ、とも思われる。(表4)

- (3) 仕事こそ人生のすべてである。人生のよこびも楽しみもその中こそ見出されるべきで、そのほかにあるのではない。
- (10) 自分の欲するままに生活をおくることが、かけがえのないほんとうの人生である。他人から何の制約もうけずに、その時その時の生活を楽しく生きればそれでいいのだ。

表5 高2 高3

(10)

17	8	6	12	7	5
2	4	5	8	6	3
<u>29</u>	12	9	<u>19</u>	7	9

ここでは(3)を肯定するものがへっているが、その部分がどこに変わったかは、後の逆対応の分析のところで明らかになろう。(表5)

- (4) 何といっても、受験勉強は必要である。そのために生徒会活動などに支障がおり、高校が予備校化されるという声もあるが、現代に生きてゆくためには、受験勉強はしてゆかねばならない。
- (7) 高校生活を、生徒会活動などを通じて、充実した生活をおくることが、将来の生活にもっとも大きなプラスになるのだ。たとえ一年ぐらい遅れたとしても、真に意義のある高校生活を送るならば何ら悔いることはない。

表6 高2 高3

(7)

2	6	<u>20</u>	3	5	10
4	7	5	1	3	12
<u>10</u>	14	20	<u>13</u>	13	16

ここでは(7)の考え方を肯定するものがへり、(4)の考え方を肯定するものが、ふえているようである。(表6)

- (5) 人生のある時代に、他のことには目もくれずただひたむきにある事にうちこむという時期をもつことは、非常によい事だと思ふ。だから受験勉強に専念して他の何ものも捨ててかえりみぬということも意味があるのだ。
- (12) それがたといどのような目的であれ、まわりのことを考えず、ただ馬車馬のようにガムシャラに進むということは、賢明な人間のなすべきことではない。だから、研究に没頭して戦争のあったことも知らなかったという学者の態度は非難されてよい。

表7 高2 高3

(12)

8	9	<u>26</u>	9	3	<u>19</u>
3	11	5	3	7	7
8	8	12	10	2	<u>16</u>

ここでは(5)についても、(12)についても、ともに肯定するものがふえているようである。これはどのように考えたらよいのであろうか。馬車馬式な生き方を肯定しながらも矛盾をやはり感じている、ともいえるし、又逆に馬車馬式な生き方を否定しながらも、やむをえずやっているともいえる。おなじことのように思われるが、そのニュアンスはずいぶん違うように思われる。(表7)

- (6) 人生は受験勉強と同じかも知れない。たとえ他の本や映画などで、心を慰さめたいと思ってもやはり単語をおぼえ、式の計算の練習をしなければならぬ。人生を生きてゆくのも、そのようなものかもしれない。
- (9) 人生は楽しくあるべきものだ。たとえ日々の仕事が単調でつまらなくても、余暇をみつけていろいろの芸術を鑑賞したり、スポーツを楽しんだりして、人生を楽しく愉快なものにしていくべきである。

表8 高2 (9) 高3

(6)	2	4	29	0	2	28
	1	3	20	1	4	14
	2	2	25	0	1	26

ここではほとんど去年と変りなく、快樂をよしとする考え方が圧倒的に多く、しかも禁欲的な考え方に対しては、肯定、否定に分裂している。(表8)

以上、それぞれの対応関係を追求してきたが、今度は、それぞれの文章についての考え方が、高2の時と高3になってからで、どのように変わったかについて分析してみよう。次の図(3)は、前にのべた判断の(1)から(5)までの項目が同一人で高2と高3でどう移動したかを示したもので、左たてが高2、右よこが高3を示す。もし判断が変わらなるとすれば、斜線の部分のようになり、従ってそこを中心に矢印の方向にいくにしたがって、前と後とで考え方がひどく変わったことを示すわけである。なお人数は66名である。

図3 (高3)

	1	2	3	4	5
5					
4					
3					
2					
1					

(高2)

(1) 人生は闘争であり、闘争こそは進歩の母である。

表9 (1)

	1	2	3	4	5
5	1	2	1	3	5
4		7	1	6	4
3	1	2	10	2	
2	2	4	4	6	1
1	1			3	

ここではそれほど大きなかたよりはみられない。

(2) 天才でない者がこの世で認められるためには、はたから狂人ではないかと思われるほどの努力が必要である。

表10 (2)

	1	2	3	4	5
5	4		2	3	3
4	1	6	4	5	2
3	1	2	4	1	1
2	3	8	7	4	
1	1		3		1

ここではさきほどの対応分析(表4)のところでもふれたが、肯定から否定に移ったものが多い。努力しても……という、自分の力の限界を感じてきたのであろうか。

(3) 仕事こそ人生のすべてである。人生のよろこびも楽しみもその中にこそ見出されるべきで、そのほかにあるのではない。

表11 (3)

	1	2	3	4	5
5	1	2	2	7	2
4	1	4	7	4	3
3		2	2	3	1
2	2	7	2	6	1
1	3	1	3		

さきほど(表5)のところでもふれた、(3)の考えを高2の時積極的に肯定していたものが、高3になってどこにちらばったか、という疑問がこの表をみるとはっきりしてくる。結局それぞれ、少しずつ否定の方に移動したものとみられる。

(4) 何といたっても、受験勉強は必要である。そのために生徒会活動などに支障がおり、高校が予備校化されるという声もあるが、現代に生きてゆくためには、受験勉強はしてゆかねばならない。

表12 (4)

	1	2	3	4	5
5	1			4	
4	1	2	6	14	3
3		4	3	4	
2		3	4	6	1
1	2	2	2	3	1

ここでは、受験勉強をはっきり肯定するものがふえているのがめにつく。

(5) 人生のある時代に他のことには目もくれず、ただひたむきにある事にうちこむという時期をもつことは、非常によい事だと思う。だから受験勉強に専念して、他の何ものも捨ててかえりみぬということも意味があるのだ。

表13 (5)

	1	2	3	4	5
5			1	1	
4	1	1	3	7	3
3	1	3	5	5	1
2	2	10	2	2	2
1	3	3	5	3	2

ここでも受験勉強専念の肯定の方にはっきり移動しているのが目につく。

(6) 人生は受験勉強と同じかも知れない。たとえば他の本や映画などで心を慰さめたいと思ってもやはり単語をおぼえ、式の計算の練習をしなければならない。人生を生きてゆくのも、そのようなものかもしれない。

表14 (6)

	1	2	3	4	5
5	1		1		1
4	1	4	7	7	1
3	1	5	4	5	1
2	1	4	4	6	1
1	3	3	2	3	

ここではそれほど大きな変化はみられない。

(7) 高校生活を、生徒会活動などを通じて、充実した生活をおくることが、将来の生活にもっとも大きなプラスになるのだ。たとえ一年ぐらい遅れたとしても、真に意義のある高校生活を送るならば何ら悔いることはない。

表15 (7)

	1	2	3	4	5
5	1		5	5	6
4		3	4	8	2
3	2	4	6	5	5
2	1	3	3	2	
1		1			

ここでもそれほど大きな変化はみられない。とくに肯定を示していた者のなかば以上が消極的判断にかわり、以前に消極的な判断を示していた者がより積極的判断にかわった点は注意すべきであろう。

(8) 人間はお互いの愛と協同とによって、現在の文化を築きあげてきたのである。

表16 (8)

	1	2	3	4	5
5	2	1	2	9	3
4	1	5	8	13	3
3	1	5	2	2	1
2		2		1	
1		1	1	1	2

ここでは、協同的な考え方を否定する方向に変化しているのがめにつく。それだけセチガライ世の中というものを考えるようになったのであろうか。

(9) 人生は楽しくあるべきものだ。たとえ日々仕事単調で、つまらなくても、余暇をみつけていろいろの芸術を鑑賞したり、スポーツを楽しんだりして、人生を楽しく愉快なものにしていくべきである。

表17 (9)

	1	2	3	4	5
5		1	3	8	25
4			3	8	6
3			1	4	5
2				1	1
1					

ここでは積極的に肯定するものが多いという現象はほとんど変っていない。今の若い世代の特徴であろう。

IV 結 論

(10) 自分の欲するままに生活をおくることが、かけがえのないほんとうの人生である。他人から何の制約もうけずに、その時その時の生活を楽しく生きればそれでいいのだ。

表18 (10)

	1	2	3	4	5
5	2	1			
4	1	4	2	4	1
3	1	5	5	3	3
2	3	12	10	2	2
1	3	1	1		

ここでは、やや両極に分散したという変化が目につく。

(11) 人それぞれの生き方がある。それを自分のあるだけの力を出して生きぬきさえすれば、その結果は問うところではない。

表19 (11)

	1	2	3	4	5
5	1	1	2	7	15
4		2	2	8	8
3			4	5	5
2				1	3
1			1		1

ここでは、積極的に共感している者がふえていることがめにつく。

(12) それがたとえどのような目的であれ、まわりのことを考えずただ馬車馬のようにガムシャラに進むということは、賢明な人間のなすべきことではない。だから、研究に没頭して戦争のあったことも知らなかったという学者の態度は非難されてよい。

表20 (12)

	1	2	3	4	5
5	1	4		3	6
4	2	5	2	9	2
3	4	2	3	5	4
2		4	2	4	
1		1	1	1	

ここでは、あまり大きな変化はみとめられない。

以上分析してきたこの調査から得られる結論は、おおよそ次の通りであろう。高校生の社会意識の一般的特徴としては、今度の高3の調査の結論は、昨年度彼らが高2の時に行った調査の結論と、大体一致するといつてよい。すなわち——彼らは社会と時代の子であるということである。彼らは相当社会についての知識はもっている。しかしそれを形成するのはマス・コミの影響が強いのである。事実正確に知らなくてもあることがらについては、すでにある一般的な態度を形成してしまっている。大体において、彼らはいわゆる良識ある判断を持っているように見える。また判断を下す際、相当慎重な態度をとろうとするものが少なくない。労働運動に対してもそれを理解しつつ健全な発展をのぞみ、快楽論をとりつつ、無制限な、制約を無視するような態度はさげようとする。受験勉強についても、それを認めつつ、しかし、そこでみられる馬車馬式の生きがいには、肯定しえないものを感じている。——極言すれば良識をそなえているがために、又社会の矛盾をも、そのまま肯定しようとする傾向がうかがえるのである。部分的には社会科教育の成果かもしれない。しかしそれ以上に直接にこうした傾向を生み出しているものとしてマス・コミュニケーションの影響は無視できないであろう。

今回の調査で前回とくらべてちがう点——ということとは、2年から3年にかわる一年の経過が彼らの上におよぼしたものとえようが——やはり受験というものの重圧感と、そのうけとめ方の問題であろう。この変化——それについては3の分析のところであつたからくりかえさないが、この変化こそここ1年間のものであるにもかかわらず、他のいかなる要因の影響よりも顕著である点、学校教育に考えさせるものをもっている。彼らが「受験期」を終えて、大学に、社会にすすんだあとでは又ちがったものになってゆくのであろうか。ともかく高校三年生の人生観、社会観を最も大きくゆきぶっているものが受験であることは以上から充分に言えるようである。

第二に、受験の影響とくらべると小さいけれど、やはり社会的意識の成長——ある点では良識的に、ある意味では妥協的に、ある意味では消極的に——をみのがすことは出来ない。その中にはのぞましくない面もあろうけれど、こうした点を無視して社会科教育を考えたとしたら、いたずらに空まわりをくりかえすだけであり、こうした現実の上にわれわれは社会科の学習指導を考えてゆかねばならないと思う。今後は、今までの研究にひきつづいてその具体的な学習指導の面にまで研究をすすめてゆきたいと考えている。